〝アジト〟には武器がある、しかも連中の数は多いと知らせてきました。もしかしてそれは、ポーランドレジスタンスの部分的動員か何かだろうか？　私は急いで、暴れん坊の警察中尉ディール指揮下の突撃隊員を派遣しました。わが方は戦ってはいるが、敵は強力だ。ハーンは援軍を投入してくれる。カー博士はむしろ慎重な行動をとるようにすすめます。夜まで長引かせて、哨兵線で包囲する――なるべくポーランド人を怒らせず、彼らを自暴自棄な行動に追い込まぬことだ。なぜなら、『もし火災がゲットーからワルシャワ全体に広がったりしたら、とてつもない面倒が起こらないとも限らない』から、と言うのです。ディールは、ゲットーの外で包囲されているこのグループの中には、国防軍兵が入っていると知らせてきました。私は、ディールは気が触れたのではないかと思いました。[1] 私はこの話を残らずベルリンに報告しました。私の頭にはもう、部下の親衛隊員が手順通り火を放ち、破壊を続けているゲットーやニスカ通りのことはありませんでした。ようやくクリューガー将軍がハーンに対して、ディールの部隊に包囲されたグループに手をつけるよう指示しました。ハーンとカーは事の処理に当たりましたが、それは軍隊式ではなく、警察式のやり方で、でした。夜通し行動し、さらにあくる日の昼までそれは続きました。結局、これらゲットーの塀ぎわに集まったユダヤ人とポーランド人の約七十五パーセントを片付けました。残りは逃げおおせました。カー博士があとで私に語ったところでは、そこにはユダヤ戦闘団員も国内軍兵士も人民軍兵士もその他のポーランド人の小グループの地下活動家、そしてポーランド人警官、いわゆる〝紺色〟もいたそうです。[2] カー博士はこれらの警官を直ちに銃殺するように命令しました。ハーンとカーはポーランド人警官をたいへん嫌っていました。ポーランド刑事警察の維持に関する中央政府とフランク総督の決定を尊重せねばならないと口では言ってましたが、これらの警官のうち少なくとも四十パーセントは熱心で活発な、地下深く潜行したポーランド地下運動とロンドン諜報機関のメンバーだということを知っていたのです」

「この日、総計約三千人のユダヤ人と数十人の〝アーリア人〟を捕え、約千人を射殺しました。一九四三年四月二十七日のこの火曜日は多忙な落ちつけない一日でした」

＊

それに続くワルシャワゲットー撤収の日々は、ユルゲン・シュトロープの部下たちにとっても苦しいものであった。

「あれはもう受身の大衆なんかじゃない」とシュトロープは話を続けた。「あれはシオニストの精鋭集団です。あの連中には、何故戦うのか、何のために戦うか分かっていたのです。毅然としていました。強固な意志を持っていたし、訓練を積んでいました。装備もしっかりしていました。粘り強く、抜け目がない。また、いつでも死ぬ覚悟が出来ていました」

「ところであなたは、ゲットー内の蜂起者たちも、いちばん大事なのは死そのものではなく、いかに死ぬかということであり、人間的誇りと将来の自分の社会の追憶を守ったということを知っていたのだとは思いませんか」と私はある時シュトロープに尋ねた。すると彼は、習い覚えた、党員的、ナチス的口調と言語で直ちに答えたものだ。

「ユダヤ人は名誉心や自尊心を持っておらず、また持つことができません。何しろユダヤ人というのは完全な人間ではないのですから。ユダヤ人は劣等人種なのです。われわれヨーロッパ人、〝アーリア人〟とは、とりわけ、われわれ――〝北欧人種〟とは、血が異なり、組織が異なり、骨が異なり、考えが異なるのです」

＊

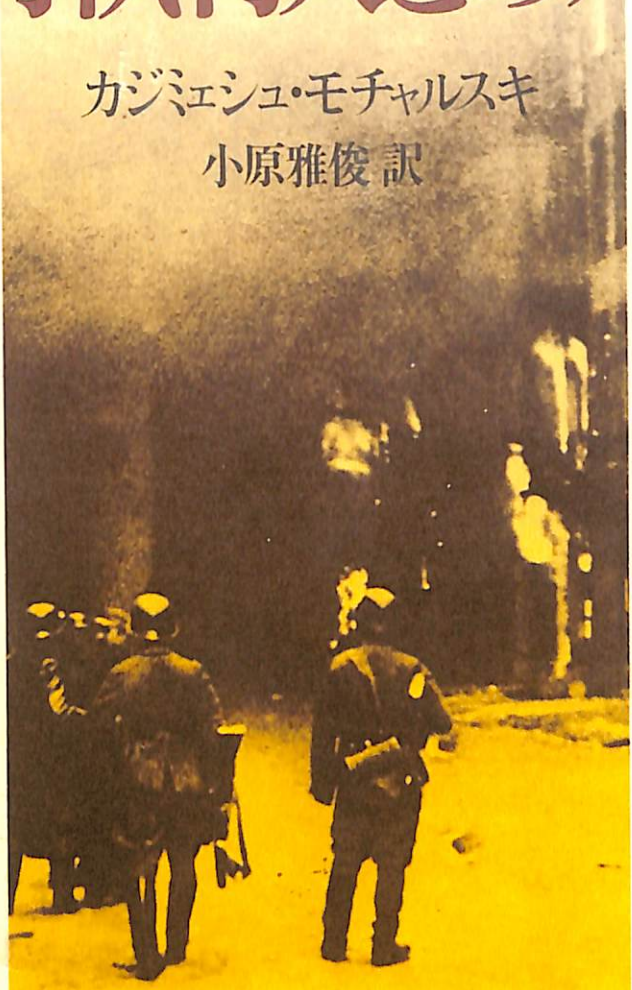
一九四三年五月一日までは、ゲットーの戦闘は、シュトロープが私たちに話したように、似たような性格と激しさを持っていた。すなわち、すでに奪取したゲットー地域の労力と時間を要する丹念至極な探索、新たな建物群への押し込み。銃火の応酬。〝モロトフ・カクテル〟、手榴弾、ユダヤ人製の機雷。ユダヤ人の疲れを知らぬ活動性。次第に激しくまた長期化する掩蔽壕メンバーとの交戦。地下住居の発見。

「四月二十八日、われわれは、数日間苦労を重ねた末に、これまで見た中で最も見事な掩蔽壕を暴き出しました」とシュトロープは報告を続けた。「それは地下二階の深さのところにあって三部分からなる近代的な換気装置網を備え、三カ所の電気エネルギー供給源、台所、便所、シャワー、都市水道の給入、アルトワ式(掘り抜き)井戸がついていました。そればかりか、掩蔽壕には燃料倉庫、貯水槽、広々した食料貯蔵室、食糧冷凍室がありました。賢明な構造です。掩蔽壕は実に驚くほど機能的に出来ていました。長い地下通路を経た出口が数カ所

死刑執行人との対話

カジミェシュ・モチャルスキ

小原雅俊 訳



ROZMOWY
Z
KATEM